

国分寺の研究

一四国を中心として一

建設工学専攻
建築史研究

me12010 ^{うきのももこ} 上野桃子
指導教員 伊藤洋子教授

1. 研究背景・目的

国分寺は天平 13 年(741)聖武天皇が仏教による鎮護国家のため、諸国に建立を命じた寺院で、正式名称は金光明四天王護国之寺という。国毎に一寺ずつ 66 カ寺と対馬・壱岐・種子島の島分寺の計 69 カ寺が建立された。その多くは、幾多の災難を受け、廃絶・再建を繰り返しながらも存続し続けている。

既往研究において、鎮護国家の国分寺から四国霊場に指定され、他とは異なった役割を担うようになった土佐国分寺の歴史を明らかにし、一考察を得ることができた。

本研究では、同じ四国内の阿波・伊予・讃岐国分寺の歴史を基に、四国の国分寺の変遷を明らかにすることを目的とする。

2. 国分寺について

2-1.国分寺建立の詔

『続日本紀』『類聚三代格』によれば、天平 13 年(741 年) 2 月 14 日(日付は『類聚三代格』による)、聖武天皇から「国分寺建立の詔」が出された。その内容は、各国に七重塔を建て、金光明最勝王経と妙法蓮華経を写経すること、自らも金字の金光明最勝王経を写し、塔ごとに納めること、国ごとに国分僧寺と国分尼寺を 1 つずつ設置し、僧寺の名は金光明四天王護国之寺、尼寺の名は法華滅罪之寺とすることなどである。寺の財源として、僧寺には封戸 50 戸・水田 10 町、尼寺には水田 10 町を施すこと、僧寺には僧 20 人・尼寺には尼僧 10 人を置くことが定められた。

国分寺の多くは国府区域内か周辺に置かれ、国庁とともにその国の最大の建築物であった。また、大和国の東大寺・法華寺は総国分寺・総国分尼寺とされ、全国の国分寺・国分尼寺の総本山と位置づけられた。

律令体制が弛緩して官による財政支持がなくなると、国分寺・国分尼寺の多くは廃れた。ただし、中世以後も相当数の国分寺が、当初の国分寺とは異なる宗派あるい

は性格を持った寺院として存置し続けたことが明らかになっている。

2-2.国分寺の存続状況

国分寺創建から現在までの地域ごとの存続状況は表 1 の通りである。国分寺は創建以降、廃絶・再建を繰り返しながらも、その多くは法灯を守り続けている。

表 1.国分寺の存続状況

	寺数	9～10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	現在
畿内	5	5	3(5)	4(5)	4	3	4
東海道	15	9(14)	4(7)	5(8)	6	7	15
東山道	8	4(7)	5(7)	3(7)	5	5	8
北陸道	7	4(7)	2(7)	1(3)	2	5	5
山陰道	8	3(6)	1(6)	2(4)	3(4)	6	7
山陽道	8	3(7)	3(6)	0(4)	3(7)	4(5)	8
南海道	6	4(6)	2(5)	2(5)	3(5)	4(5)	6
西海道	11	6(11)	3(9)	6(7)	6	8(9)	8
()の数値は考古学的知見を加えた合計数							

3. 四国霊場と国分寺

3-1.四国霊場(四国八十八ヶ所巡り)について

四国霊場は、弘仁年間(810～823)に弘法大師が霊場に定めた寺院で、阿波 23 ケ寺・土佐 16 ケ寺・伊予 26 ケ寺・讃岐 23 ケ寺の計 88 ケ寺を巡礼することである。四国の国分寺は全て本霊場に指定されている。

四国霊場が成立したのは室町時代で、一般民衆に広がり、活発になったのは江戸時代と考えられている。

成立の根拠となるものの一つに、寺院に残された『落書』がある。最古のものに第 69 番札所観音寺(讃岐)の貞和 3 年(1347)に書かれた「常州下妻庄造各□□弁阿闍梨□ 貞和三年三月廿五日」がある。また、第 80 番札所国分寺(讃岐)にも落書があり、大永 8 年(1528)に「□□山谷上院隠□ 同行五人 大永八年五月廿日」とある。

さらに、霊場には弘法大師を祀る「大師堂」が建立されている。『四国遍礼霊場記』(1689 年刊行)で大師堂が存在する寺院は 35 ケ寺である。その中で、土佐国分寺のみ大師堂の建立が確認できた。『四国遍礼名所図会』(1800 年刊行)では 85 ケ寺に大師堂が描かれており、全ての国分寺で大師堂の存在を確認することができた。

3-2.四国霊場の宗派

四国霊場の宗派は、弘法大師が開創したものであるから、真言宗が主であるが、異なった宗派も存在する。88ヶ寺中 10ヶ寺が他宗派である。

4. 四国各国分寺について

各国分寺の概要をまとめたものが表 2 である。

表 2. 各国分寺の概要一覧表

都道府県	阿波	土佐	伊予	讃岐
札所	第15番	第29番	第59番	第80番
寺名	薬王山国分寺金色院	摩尼山国分寺宝蔵院	金光山国分寺最勝院	白牛山国分寺千手院
住所	徳島市国府町	南国市国分	今治市国分	高松市国分町国分
本尊	薬師如来	千手観世音菩薩	薬師瓊瑠光如来	千手観世音菩薩
開基	行基菩薩	行基菩薩	行基菩薩	行基菩薩
創建	天平13年(741)	天平13年(741)	天平13年(741)	天平勝宝8年(756)以前
宗派	曹洞宗	真言宗智山派	真言律宗	真言宗御室派
本堂	文化8年(1811)	室町後期(国宝)	寛政元年(1789)	鎌倉中期(重文)
大師堂	うすさま明王堂	19世紀中～末	○	○
仁王門	○	天保8年		寛文9年
鐘楼	○	○	○	18世紀中
堂	明王堂	開山堂 19世紀中～末	持仏堂	地藏堂 毘沙門堂:安永7年
その他	方丈	書院 庫裡	方丈	春日社:18世紀末 金毘羅社:18世紀中
史跡	県指定史跡 国の名勝庭園	国史跡	国史跡	国特別史跡

4-1.阿波国分寺

阿波国分寺は創建以降、長宗我部氏の戦火により焼失するまで寺歴は不明である。長宗我部氏による焼失後の境内図として『四国遍礼霊場記』がある。この図では、小堂一字あるのみで、廃絶した状態を確認することができる。

その後、寛保元年(1741)に曹洞宗丈六寺の吼山養獅が藩命により中興の任を負って入寺し、伽藍の整備を手がけた。このとき、曹洞宗へ改めた(それまでは真言宗)。

そして、光山文明が文化 8 年(1811)瑠璃殿(現本堂)の上棟を始め、在住時に大師堂の建立を行った。

明治 27 年(1894)の銅版画では整備され、興隆した境内が描かれている。

4-2.土佐国分寺

土佐国分寺も創建以降、天文 19 年(1550)頃兵火により焼失するまで寺歴は不明である。その後、永禄元年(1558)現本堂は四国統一を行った長宗我部国親・元親親子によりに再建された。

長宗我部氏滅亡後、慶長 5 年(1600)に山内一豊公が土佐初代藩主として入国し、二代藩主忠義公の時代に諸堂の復興が進められた。寛永 11 年(1634)に大師堂は建立された。建物の造営修復は藩の援護を受けて行われていた。

本国分寺には 6 枚の古絵図が所蔵されており、これらから伽藍配置および建物の変遷過程を明らかにした。建物については、仁王門と大師堂の変遷を確認することができた。

4-3.伊予国分寺

伊予国分寺は天慶 2 年(939)藤原純友の乱で焼失し、国主の援助で復興した。しかし、元暦元年(1184)源平合戦で焼失。再興するも貞治 3 年(1364)には讃岐の細川頼之が侵入して焼失。天正 12 年(1584)には 3 度重興した堂宇をも、長宗我部元親と伊予国守河野通直との戦による兵火で焼失した。

そして、河野氏は敗れ、支援者を失ったために復旧できず、『四国遍礼霊場記』では「茅葺の小堂が寂しく建つのみ」と書かれている。

本格的な復興が行われたのは江戸時代後期からで、現在の本堂は寛政元年(1789)に 43 代住職恵光上人が建立したものである。

4-4.讃岐国分寺

讃岐国分寺は、創建時の金堂礎石と七重塔礎石があり、創建時の面影をよく残している。創建時の境内は、礎石が多く残され、創建時の風景を留めていることから国の特別史跡に指定されている。

本国分寺も他の国分寺と同様、長宗我部氏による戦火を受け、堂宇の多くを失うこととなったが、幸いにも本堂は災難を免れた。

その後、近世になると讃岐領主になった生駒氏、松平氏が国分寺の再建に尽力した。

本国分寺は、『四国遍礼霊場記』(1689 年刊行)を合わせ 4 枚の古絵図があり、江戸時代以降の壮大な伽藍を確認できる。

5. まとめ

四国の国分寺は四国霊場に指定されつつも、廃絶・再建を繰り返しながら存続した。

人々が心のよりどころとして巡礼の旅を続けるかぎり、安定して存続し続けていくであろう。

参考文献

『国分寺の中世的展開』 追塩千尋 1996
『四国遍礼霊場記』 寂本 1689
『金光山国分寺』 片山才一郎 1973
『庭研』 東京日本庭園研究会 2011 年秋号
『四国遍路とはなにか』 頼富本宏 2009
第 59 番金光山国分寺【最勝院】